

## 研究主題 「仲間とのかかわりを通して、 自己の高まりを実感することのできる走り幅跳びの学習」

東京都教職員研修センター研修部経営研修課  
新宿区立落合第一小学校 教諭 薩摩博之

### I 研究のねらい

明るく活力のある社会を形成していくためには、豊かなスポーツライフを実現していくことが重要であり、児童期においては、学校や家庭、地域における様々な運動遊びを通して、仲間や異年齢集団との交流を幅広く行うことが重要であるとされている。

体育科では、運動の楽しさや喜びを味わい、運動への関心や自ら運動する意欲、仲間と仲よく運動をすることなどの、運動に親しむ資質や能力を育成することが求められている。そのためには、運動の課題を解決する学習の中で、仲間と豊かにかかわり、互いの課題等を共有しながら協力して活動することが大切である。さらに、課題解決を通して、自己の高まりを実感することができれば、運動への関心や意欲も高まっていくと考えた。

そこで、本研究では、個人種目であるため、人とのかかわりを重視した実践例が少ない陸上運動「走り幅跳び」で、仲間とのかかわりを通して、自己の高まりを実感することのできるカリキュラムを開発することとした。

### II 研究の内容と方法

#### 1 研究の仮説

走り幅跳びの学習において、仲間とのかかわりを重視した学習過程に身に付けさせたい力とその手だてを明確に位置付ければ、友達とかかわる楽しさや大切さを実感でき、自己の運動に対する意欲や記録が高まるであろう。

#### 2 基礎研究について

(1) 文言の定義（今回の研究では、次のようなとらえ方で研究を進めた。）

- ① 「かかわり」・・・本研究ではかかわりを「認め合いや思いやりなどの認知的・情意的コミュニケーションが双方向で行われること」ととらえ、研究主題の「仲間とのかかわり」を、児童が励まし合ったり、認め合ったり、教え合ったりすることと定義した。
- ② 「自己の高まり」・・・本研究では自己の高まりを、運動への意欲や記録が高まることと定義した。
- ③ 「身に付けさせたい力」・・・体育学習の基礎・基本であり学習指導要領に示された目標及び内容である。

#### (2) 走力と跳力の関係

文献より、助走・助走速度・跳躍距離の関係を明らかにし、小学校段階における技能のポイントを明らかにした。

#### (3) かかわりや走り幅跳びに関する先行研究の分析

### 3 調査研究について

#### (1) 目的

友達とのかかわりを通じた体育学習で楽しいと感じた経験や走り幅跳びの運動に対する興味・関心、運動の仕方の工夫などについて調査し、実態を把握する。また、教員への調査を通し

て走り幅跳びの授業の実態や効果的な指導法を探り、指導の手だてや学習過程の作成に生かす。

(2) 実施時期・対象

7月中旬から下旬・都内公立小学校(16校)教員124名・児童554名

(3) 分析結果

体育学習の中で児童は、「できない運動ができるようになったとき」や「記録が伸びたとき」にうまくなったと感じている。また、これらの項目と統計的な処理を行った結果、「自分のよいところをたくさんほめられる」ことや「いっしょに活動する時間がたくさんある」ことと有意な関係が見られた。すなわち、児童に自己の高まりを実感させるためには、授業の中でかかわりの場を設定することが有効であるという結果である。

また、走り幅跳びを指導する際の効果的な手だては、「自分の力に合った目標記録の設定」「教え合い」など様々あるが、教員対象の調査の結果、技能・態度・学び方などの学習のねらいを踏まえ、効果的に指導しようとする意識はあまり見られなかった。そこで、学習のねらいに即して身に付けさせたい力を明確にするとともに、その効果的な手だてを一層工夫していく必要があると考えた。

4 実践研究について

基礎研究、調査研究の結果から、研究の視点を「(1)かかわりを重視した学習過程」、「(2)身に付けさせたい力とその手だての明確化」の2点とし、(表1)の学習過程で検証授業を行った。

表1 学習過程

段階 時数	知る		取り組む			
	1	2	3	4	5	6
学習活動	1 オリエンテーション ・単元全体の見通しをもつ 2 めあての確認 3 準備運動 4 今もっている力を知る 5 整理運動 6 学習のまとめ ・学習資料を活用し、自分の力に合った目標記録を設定する	1 学習の進め方の確認 2 めあての確認 3 準備運動 4 ポイントタイム ・走り幅跳びの技能のポイントをつかむ 5 練習方法やアドバイスタイムの仕方を知る 6 整理運動 7 学習のまとめ	1 学習の進め方の確認 2 グループごとに互いのめあての確認 3 準備運動 4 ポイントタイム ・走り幅跳びの技能のポイントをつかむ 5 アドバイスタイム ・4人組みのグループで互いの運動を見合い、かかわりながら運動する。(ダブルペア学習) ・グループを前半(2人)・後半(2人)の2つに分け、運動する側とアドバイスする側に分かれて練習するようにする。 6 チャレンジタイム ・グループ対抗競争に取り組むとともに、自分の目標記録に挑戦する。 7 整理運動 8 学習の振り返り			
教 支 主 師 援 の	・気持ちよく踏み切って跳躍できるように、記録は実測するようにする。		・トップスピードで踏み切ることが記録の向上につながることを指導し、助走に重点をおいて助言する。		・友達と認め合ったり、教え合ったりしながら活動しているグループを賞賛する。	

(1) かかわりを重視した学習過程

調査研究を踏まえ、児童と一緒に活動する時間を十分に確保することとした。学習過程の知る段階では、仲間とのかかわりの必要性を理解できるようにオリエンテーションを工夫した。

そして取り組む段階では、4人グループを2つのペアに分け、前半グループと後半グループに分かれて互いの運動を見合い学習を進めた。この学習形態をダブルペア学

表2 ダブルペア学習

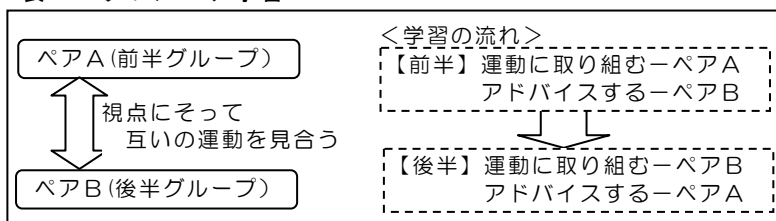
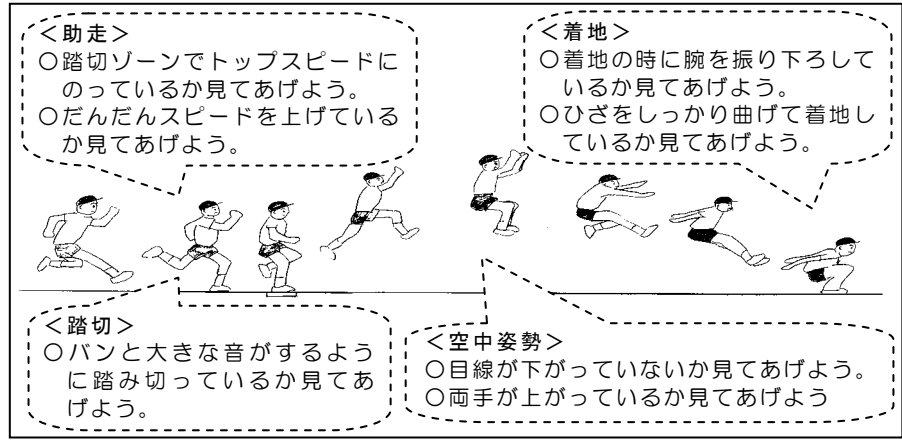


表3 互いに見合う視点

習と名付けた。

また、そのグループを編成する際には、かかわる力（励まし合う力・認め合う力・教え合う力）と関心・意欲、思考・判断の違いを考慮し、傾向の異なる児童が互いのよさに触れられるようにした。



さらに、走り幅跳びの活動を児童が効果的に互いによく見合えるように、助走・踏切・空中姿勢・着地の練習の場ごとに互いに見合う視点を提示した。(表3)

(2) 身に付けさせたい力とその手だての明確化

子どもたちに運動に親しむ資質や能力をはぐくむために、文献や先行研究、小学校・中学校学習指導要領の関連などを分析することを通し、走り幅跳びの学習において身に付けさせたい力を技能・態度・学び方の観点ごとに重点化し、具体的に示すとともに、その手だてを明確にした。(表4)

表4 身に付けさせたい力とその手だて一覧

段階	知る	取り組む
身に付けさせたい力とその手だて	○ トップスピードで踏み切る力 ・ 「助走」「踏切」「空中姿勢」「着地」の4つの運動局面ごとの練習の場の設定 ・ 運動局面ごとに技能のポイントをしぼった学習資料の提示	○ 自分に合った助走距離を見付け、遠くに跳ぶことができる力 ○ グループの友達と互いの運動を見合い、励まし合ったり、認め合ったりすることができる力 ○ グループ競争では、勝敗に対して公正な態度を取ることができる力 ○ グループの友達と互いの運動を見合い、認め合ったり教え合ったりすることができる力 ○ グループ競争では、ルールを守り最後まで自己の最善を尽くして運動することができる力
	・ かかわりの必要性を理解するためのオリエンテーションの工夫 ・ 一緒に活動する時間を十分に確保するダブルペア学習 ・ 友達へのアドバイスの仕方が分かる学習資料の提示 ・ 互いに見合う視点を明確にした練習の場の工夫 ・ 個人の違いを考慮したグループ編成 ・ 競争型を取り入れた学習活動 ・ 個に応じた適切な支援	
	○ 自分の力に合った目標記録を設定できる力 ・ 自分の力に合った目標記録を設定するための学習資料の提示 ・ 運動局面ごとの練習の場の設定 ・ 個に応じた適切な支援	○ 目標記録を達成するための課題を決めることができる力 ○ 自分の課題にそって学習を振り返り、伸びやつまづきに気付くことができる力

Ⅲ 研究の結果と考察

研究の視点に基づく実践が有効であったかどうか、児童の変容及び意識調査の結果などから検証した。

1 友達とかかわる楽しさや大切さの実感について

学習が進むにつれて、児童が主体的にかかわる場面が増え、相手のめあてを意識してアドバイスする姿やよい動きを認める姿が見られるようになった。学習後の児童の感想からは、「みんなからいろいろなアドバイスされてとてもうれしかった。」「私はアドバイスが一番重要だと思

う。」といった、かかわりの楽しさや大切さを実感した記述が見られた。

また、かかわりに対する意識の変容を確かめるため、「走り幅跳びの学習を楽しくするための工夫」という質問項目と、「体育学習での自己の高まり」の2つの質問項目から、両者の関係を統計的に処理し、事前・事後で比較した。その結果、授業後、「①励まされる、②ほめられる、③教えてもらえる」と、「体育学習で自分がうまくなったと思う。」の相関がより強くなった。(表5)

表5

質問項目		授業前	授業後
体育学習での自己の高まりの実感	①たくさん励まされれば、楽しくなる。	0.157	0.405
	②よいところをたくさんほめられれば、楽しくなる。	0.282	0.362
	③たくさん教えてもらえれば、楽しくなる。	0.292	0.415

これらのことから、仲間とのかかわりを重視した学習過程により、児童は友達と

\*表内の数値はピアソンの積率相関係数

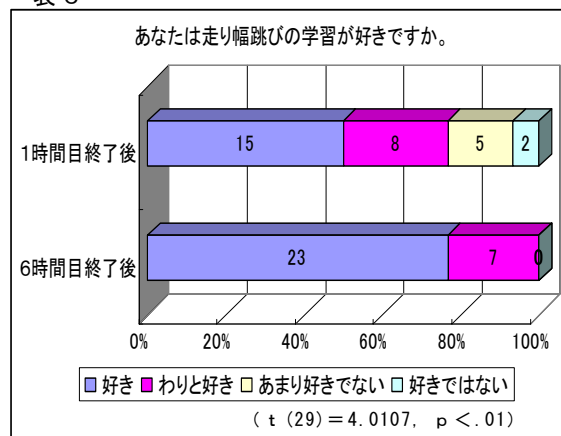
かかわる楽しさを実感することができたといえる。また、自己の高まりを実感させるためにかかわりを取り入れることは有効だと考える。

## 2 運動に対する意欲の高まりについて

陸上運動「走り幅跳び」の学習は、今回の学習が初めてとなるため1時間目と6時間目の児童の意識を比較した。結果は右図(表6)の通り。1時間目終了後には、走り幅跳びを「あまり好きでない」と答えた児童が5人、「好きではない」が2人であったが、単元終了後には0人になった。

また、検証授業の中でも授業が進むにつれて、「もっと走り幅跳びをしてみたい」という声が児童から聞かれるようになった。さらに、単元終了後の学習感想では、「走り幅跳びが好きになった。」「また、走り幅跳びの学習をやりたい。」という感想が多く見られた。「走り幅跳び」の運動に対する意欲が高まったといえる。

表6



## 3 記録の高まりについて

学習過程の【知る段階】での1時間目の記録と【取り組む段階】のまとめとなる6時間目の記録を比較した結果、右図(表7)のような結果となった。平均で約34 cm記録が伸びた。本単元の学習を通して、記録が高まったと考える。

## IV 今後の課題

- ・ 学習を進める上では、身に付けさせたい力を明確にし、さらに実態に応じた柔軟な対応が求められる。児童の力の適切な見取り方や発展的な支援の仕方について、さらに研究を深める。
- ・ 他の領域、種目でのかかわりを通じた学習についてさらに研究を深めていく。

表7

